

士業が語る！ 生成 AI のリアル「できること」「難しいこと」

生成 AI を使いこなす人は、「任せどころ」を知っている

日々の暮らしからビジネスシーンまで、今や私たちの生活に大きな影響を与えている生成 AI（ジェネレーティブ AI）。ここ数年、「生成 AI の上手な活用法」や「生成 AI のメリット・デメリット」などをテーマにした特集を、さまざまなメディアで目にする機会が増えました。では、弁護士や税理士などの士業（専門家）は、生成 AI という存在をどう捉え、どのように向き合っているのでしょうか。ライター小林が LTR メンバーに迫るインタビュー企画。第2回は、弁護士の鈴木 洋平（すずき・ようへい）さんにお話を伺いました。

依頼者も生成 AI を使う時代、専門家に求められること

——生成 AI（以下、AI）が進化したことで、業務に変化はありましたか？

【鈴木】そうですね、最近、依頼者が自ら AI で知識を得ることが増えてきた印象です。ご相談に来る前にいろいろと調べてくる方が多いので、こちら先回りしてスムーズにご相談に対応する必要があると思っています。そこであらかじめ「相談者がどのような知識を得ているか」「その知識は相談事案を正しく分析したものなのか」などを把握するために AI を活用しています。

——その「先回り」は大事なこともかもしれませんね。

【鈴木】「インターネットでは〇〇と言われることも多いですが、実は××なんです」「あなたの事案はこういう事情が付け加えられているので、△△となりますよ」などの回答をすることで、依頼者からの信頼を得られるとも感じています。

——実際に AI ツールを使用してみて、どのような印象を持ちましたか？

【鈴木】「ついに、ここまで精度の高いものが出るようになったか！」というのが率直な感想です。よく使用しているのは「Chat GPT」と「Gemini」で、まずこれらあたりを付け、あえて二つを使うことで偏りがないようにしています。また録音や文字起こしだけでなく会議録の作成までやってくれる「Plaud（プラウド）」は、電話での会話も同様に仕上げてくれます。これらで業務時間は圧倒的に短縮されました。「こんなふうに要約したのか」と感心することもあります。

——録音だけでなく、情報を瞬時に解析し要約データが出る。「一つ時代が進んだな」と思いますね。

【鈴木】これまでは自分の記憶と相違があれば、録音データを聞き直していましたが、その必要もありません。今は依頼者との打ち合わせ時だけでなく、相手方と交渉する際にも用いています。依頼者にも相手方との交渉状況を共有してもらえるので、とても役立っていますね。

すべてを任せない。「使い分け」が効率化のカギ

——弁護士の業務の中で、「使い勝手がよい」と思ったツールもあるとか？

【鈴木】はい。「Legalscape（リーガルスケープ）」というサービスで、法律文献や「D1-Law.com（※）」という判例体系、国や自治体などのビッグデータに限定して情報を抽出し整理してくれるものです。情報の根拠を示し、かつ何よりもその根拠が信頼できるので、使用するようになりました。これまでは一から文献にあたったり、索引を開いてから該当するキーワードのページを目で追ったり……と時間がかかっていましたが、一瞬にして分かるようになったのは大きな変化です。

（※）第一法規株式会社が提供する国内最大級の収録数を誇る法情報総合データベース。

汎用型 AI ツールにはまだまだ正確性に欠けるものも多く、架空の判例をあげてくることもあるのに対し、「Legalscape」は法律の文献・判例・ビッグデータといった信頼できる根拠がある特化型 AI ツールと言えます。両方とも使うのが良いと思っています。

——確かに「見極める目」は重要かもしれません。

【鈴木】ツールのレベルはもちろん、業務において「どのパートに用いるか」も大切です。たとえば弁護士業務には「訴状の作成」がありますが、現段階では AI に最初から訴状を作ってもらうことは難しい。でも、“ある部分”に関しては任せられるようになってきています。弁護士が請求者側の代理人になる場合、まずは内容証明郵便などで相手方に最後通告を行うことが通例です。その内容証明郵便のデータを AI に与えて、それをもとに訴状の形にしてもらうことはできるようになりました。このやり方は、後に AI の助力を受ける前提で、その前段階にある作業を行っておく、という逆転の発想です。

——部分的に使うことで、他の業務に集中できそうです。

【鈴木】そうなんです。具体的には「内容証明郵便に事実関係を記載する（この段階で交渉決裂後には訴状が作成できるような内容にしておく）→交渉決裂後は AI に投げて訴状の形式にもらう」といった流れです。まるで、もうひとり人がいるように感じることもあります。

——効率アップでいえば、会議のアジェンダや議事録の作成に使用している方も増えましたよね。

【鈴木】私も使っています。あっ、事前にこのインタビューに関する回答の骨子をお送りしましたよね？ これも AI で作成したんですよ。

——すごく明確で分かりやすかったです！ 改めて本インタビューを通じ、「どの工程に AI を組み込むか」を上手に選ぶこと、作業の切り分けの大事さを実感しました。ありがとうございます。

さらに、「こんな使い方をしています」と挙げくれた鈴木 洋平さん。日々 AI を使ってゆく中で、メリットとデメリットを感じることもあるそうです。この続きは、WEB（ホームページの連動記事 / 下の QR コードより）にてご覧ください。（取材・文／小林 真由美）

本記事の続き
はコチラから
→→



鈴木 洋平さん
の事務所 HP
はコチラから
→→

